



TITLE:

<書評>田中雅一著『誘惑する文化人類学 --コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社、2018年、定価3,800円+税、328頁

AUTHOR(S):

大村, 敬一

CITATION:

大村, 敬一. <書評>田中雅一著『誘惑する文化人類学 --コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社、2018年、定価3,800円+税、328頁. コンタクト・ゾーン 2019, 11(2019): 462-472

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/243998>

RIGHT:

田中雅一著

『誘惑する文化人類学 ——コンタクト・ゾーンの世界へ』

世界思想社、2018 年、定価 3,800 円＋税、328 頁

大村敬一*

1 はじめに——可能性の海からの誘惑

本書は、著者である田中雅一が 1997 年から 2011 年の間に執筆した論文を編纂した論文集であり、「おわりに」で著者自身が回顧しているように、自らのフィールド調査に基づきながら多様な異分野の探求者たちとの共同研究を通して鍛えられてきた 14 年間にわたる著者の人類学的思考の軌跡である。それだけに、その思考のダイナミックな展開を追体験することができるという点で魅力に溢れてはいるものの、一気に書き下ろされたモノグラフとは異なり、それぞれの章の独立性も高く、その時々著者の思考の揺れが映し出されているため、論旨がストレートに展開されているとはいえない。

もちろん、本書には一貫した論理が力強く流れている。全体化という植民地主義的な暴力に抵抗する新たな人類学を目指して、近代人類学の基底に流れる「個人／社会」や「精神／身体」、「われわれ／かれら」などの二元論に挑戦しつつ、ルイ・アルチュセールからジュディス・バトラーを経た「主体化」の議論を鍛えなおし、フレデリック・バルトのトランザクショナリズムとメアリ・ルイーズ・プラットのコンタクト・ゾーン概念を批判的に考察することで、「誘惑」と「コンタクト・ゾーン」という概念にいたる思考の道筋は、本書を貫く軸線となっている。しかし、それぞれの章では、その時々著者の関心や共同研究のテーマなどを反映して、その軸線に沿いつつも、多様なアイデアがきらめく星々のように散りばめられており、それら豊かな可能性を秘めたアイデアを単一の論理でまとめることは難しい。むしろ、あたかも本書が目指す全体化への抵抗を象徴するかのよう、簡潔な要約を拒む豊穡な議論ときらめくアイデアの数々にこそ、本書の真の魅力がある。

この意味で、本書には読者のそれぞれが著者の思考の軌跡に寄り添うことで見出すであろう多様な可能性が秘められており、本書は読者にそれぞれの独創性に従って読み解くこ

*OMURA Keiichi 放送大学

とでそれぞれの世界を拓くように誘惑する「可能性の海」であると言えよう。その可能性の海は以下の本書の構成にあるように広く深い。その海を遠くまで渡り、あるいは深く潜り、そこでどのようなアイデアを狩り取って、どのような世界を拓くのか。そう呼びかける本書の誘いに乗って、ささやかながら、評者も本書の可能性の海に乗り出してみたい。もちろん、そうした評者の試みは、自らの人類学的思考の視点から読み解くことで評者が予感した世界の可能性の断片にすぎない。しかし、本書の豊穡な海から多様な可能性を拓く読者の一人として、本書を今日の時代状況に位置づけながら、あえて誤読をおそれずに大胆にその可能性を掘り起こすことで、本書が読者たちの間に喚起するコンタクト・ゾーンを少しでも豊かにすることができるよう努力してみよう。

はじめに

序 章

第Ⅰ部 誘惑の文化人類学

第1章 誘惑と告白

第2章 誘惑モデルと闘争モデル

第3章 構造と誘惑のトポス——カースト社会に生きる

第4章 「未開」の誘惑——モダン・プリミティヴ論

第5章 モノの誘惑——フェティシズム論

第Ⅱ部 コンタクト・ゾーンの文化人類学

第6章 トライバル・ゾーンからコンタクト・ゾーンへ

第7章 民族誌の時間

第8章 暴力とその変貌

第9章 実用人類学の系譜

第10章 探検と共同研究

補論1 トランザクショナリズムの限界と可能性——フレドリック・バルトの人類学

補論2 場所の誘惑——カスタネダとスターホーク

おわりに

463

2 「全体化」の誘惑への抵抗——「人新世」時代を生き抜くために

身体や感情や環境などの自然要因はもちろん、非合理的な慣習やコスモロジーなどの文化、さらには時空間の制約までも離れ、鳥瞰的な視点、あるいは全能な神の視点から、合理的な理性に従って対象社会を全体として一挙に理解しようとする「全体化」への誘惑。人類学者であれば誰もが経験するこの誘惑は、本書が指摘するように、主体としての自己の制御と管理の客体に他者を一方的に押し込めて支配しようとする植民地主義的な客体化の暴力への誘惑でもある。全体化という神の視点に立つことは、身体や感情などの自然要因からの制約も文化の偏見（バイアス）からも自由な合理的主体として、それらの制約や偏見に縛られたままの非合理的な他者を一方的、暴力的に支配と管理の客体とすることで

もあるからである（はじめに、序章）。

それでは、そうした全体化という暴力への誘惑に抵抗し、別のかたちで他者を理解して他者とつき合ってゆくためには、どうすればよいのか。この本書の問いは、これまで数世紀にわたって拡張してきた「近代」のやり方をあらためねば、人類が絶滅する可能性すら指摘されている今日という時代において、重要な意味をもっている。ブルーノ・ラトゥール [2008] が明らかにしたように、近代の拡張を支えてきたのは、「社会／自然」の二元論のイデオロギーに基づく客体化の暴力であり、今日、「人新世」(anthropocene) ということばのもとに、その暴力が人類自らまでも絶滅させてしまう可能性に警鐘が鳴らされているからである。

いつをもって「近代」がはじまるのか、「近代性」とは何かについては諸説ある。しかし、おおむね大航海時代以後の西欧で徐々に構築され、そこを中心に全地球規模に拡張しつつつけてきた産業資本制と科学技術と国民国家の複合体としてのグローバル・ネットワークを支える一連の考え方や制度や生き方全般が「近代」と呼ばれることが多い。ラトゥールが明らかにしたように、この近代の根幹を基底で支えているイデオロギーが「自然／社会」の二元論である。この二元論では、宇宙のあらゆる存在を考えたり、それらに働きかけたりするに先立ち、その前提として、人間だけからなる社会と非人間（モノ）だけからなる自然に宇宙全体が分割される。そのうえで、身体や感情や環境などの自然要因はもちろん、非合理的な慣習やコスモロジーなどの文化からの影響を排除すればそれだけ、人間は自然の普遍的な真理を明らかにし、理性に従って社会をより合理的かつ自由に構築することができる¹とされる。そのため、自然の真理の開示と社会の自由な構築を保証する社会と自然の分離と純化が普遍的な進歩として目指され、社会と自然の相互作用である経済も、その進歩によってより合理的なものに進歩するとされる¹。

この進歩の名のもとに目指される「社会」と「自然」の分離と純化こそ、本書が抵抗しようとする全体化と客体化の暴力に他ならない。近代が目指す「人間」（科学者や資本家としての市民）は、進歩の名のもとに、身体や感情や環境などの自然要因はもちろん、非合理的な慣習やコスモロジーなどの文化からも解放された自由な主体として、自然の非人間（モノ）はもとより、この分離と純化を目指さない人びとをも一方的に客体化して動員することを正当化される。そして、実際に、この二元論のイデオロギーに基づく客体化によって、このイデオロギーに従わない人びととモノを手当たり次第に動員することで、産業資本制と科学技術と国民国家の複合体としてのグローバル・ネットワークは西欧から爆発的に拡張し、今や全地球を覆うどころか、宇宙にまで進出しようとしている。これこそ、グローバリゼーションと呼ばれる歴史現象に他ならない。

この地球規模で拡張するネットワークから私たちが大きな恩恵を受けてきたことに疑いはない。私たちが生きる世界は全地球規模、さらには宇宙にいたるまで拡大され、その生活はかつてないほど便利で豊かなものになっている。この意味で、近代のイデオロギーに駆動されたグローバル・ネットワークは全面的に否定されるべきものではない。しかし、

1 この仕組みの詳細については、ラトゥール [2008] の議論についての大村 [2010] の議論を参照。

他方で、モノはもちろん、近代の二元論に基づく進歩のイデオロギーを共有していない他者を一方的に支配と管理の客体とし、グローバル・ネットワークの拡張のために手当たり次第に動員する植民地主義的な客体化の暴力は大きな問題を引き起こしている。富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しくなるという世界の仕組みに従って南北問題が深刻化し、人口問題、食糧問題、頻発する低強度紛争、全地球規模での気候変動と環境汚染など、人類が直面している問題は深刻になってゆくばかりである。

こうした状況のなかで、人類の影響が地球の地層を変えつつあることを根拠に、「人新世」という新たな地質年代が21世紀に入って提唱され、人類が人間と非人間（モノ）に対する全体化と客体化の暴力によって地球環境に与えた影響の結果として地球での人類自身の生存可能性が脅かされつつあることに警鐘が鳴らされている²。この「人新世」ということばに象徴されるように、人間と非人間（モノ）を含めた他者を全体化・客体化する暴力はもはや限界に達している。それでは、近代を全否定するのではなく、その長所と恩恵を維持しつつ、この近代を駆動してきた全体化と客体化という暴力的な他者との関わり合い方を修正するためには、どうすればよいのだろうか。「人新世」ということばのもとで近代の暴力的な他者とのつき合い方に抜本的な見直しが求められている今日、本書を通底する問い、全体化と客体化という暴力への誘惑に抵抗し、別のかたちで他者を理解してつき合ってゆくためには、どうすればよいのかという問いは、近代人類学の他者理解を超えた拡がりと重要性をもつ問いであり、人類の存亡を賭けた問いであると言っても過言ではないだろう。それでは、その問いに本書はどのような解を与えているのだろうか。

465

3 誘惑——近代的主体の暴力に抗する受動的能動＝能動的受動のエイジェンシー

この問いへの解を探し求める本書の探究は、全体化による客体化の暴力の故に近代人類学では見過ごされてきた「個人」と「感情」と「身体」と「社会」の関係に正面から取り組むために、その関係が実際に展開される日常的実践の場、とくに人類学者がその日常の実践に生身の身体と感情をもって参加するフィールドワークの場にあくまでもとどまって行われる。

これまでの近代人類学では、全体化による客体化の暴力を揮う結果として、人類学者をはじめとする「近代人」としての自己は感情や身体からも文化からも自由な合理的個人となる一方で、他者は感情や身体に束縛され、慣習やコスモロジーなどの非合理的な文化に従属する主体に押し込められてきた（序章）。しかし、もちろん、人類学者が感情や身体からも文化からも解放されているわけでもなければ、対象社会の人びとが合理的でも理性的でもないわけではない。人類学者が現地の人びとの日常生活に参加するフィールドでの身体的かつ感情的な相互交渉から距離をとって民族誌を書くことで揮う全体化と客体化の

2 この「人新世」に関する議論については大村〔2017a, 2017b, 2018〕の紹介を参照。

暴力によって、自己と他者は両極に割り振られるのであって、フィールドの現場では、どちらも身体と感情と環境に振り回され、それぞれの慣習やコスモロジーに従属しつつも、合理的で理性的な個人として相互交渉を交わしている（序章）。もちろん、これはフィールドだけでなく、人類学者が生きる近代の日常生活の場にも、対象社会の人びとの日常生活の場にもあてはまる。

この日常生活での相互交渉で展開される「個人」と「感情」と「身体」と「社会」の関係について、ルイ・アルチュセールの主体化論とジュディス・バトラーのエージェント論とフレデリック・バルトのトランザクショナリズムを導きの糸に再考することで、著者は自由意志をもつ個人や規則に従属する主体に代えて、他者の身体や感情と共鳴する自己の身体や感情を通して「エイジェンシーのコミュニティ」に開かれた「エイジェント」（代理する主体）を見出す（序章、第2章、補論1）。そのエイジェントは身体と感情を通して他のエイジェントとの相互交渉に開かれており、むしろ、その相互交渉を通してはじめて相互に「代理する主体」として主体化される。そこで主体化されるエイジェントは、社会を支配する大文字の主体の権力に従属することでアイデンティティを獲得することも、そのアイデンティティの獲得と構築を通して権力が押しつけるイデオロギーや規則を内面化し、それらに主体的に従うわけでもなく、発話や身振りなどを通してパフォーマンスに相互に代理し合うエイジェントとして対等な二者関係を結ぶ。その二者関係が次々と繋がって広がってゆくことで、エイジェントのパフォーマンスなネットワークが境界なきエイジェンシーのコミュニティとして生成される³。

こうしたエイジェント間のパフォーマンスな相互交渉を特徴づける相互行為として著者が注目するのが「誘惑」である（第I部）。権力の大文字の主体の呼びかけによって一方的、従属的に主体化され、その権力が与えるイデオロギーや規則に従って身体や感情を含めた自己を規律・訓練しながら、その権力から与えられるアイデンティティをパフォーマンスに構築しつつ相互交渉する主体が秩序だった社会を生成する相互行為の場合とは異なり、誘惑の場合には、そうした権力からの呼びかけを通じた支配なしに、身体と感情を通してパフォーマンスに相互交渉するエイジェントたちが、その相互交渉を通して相互に相手を能動化することで主客が入れ替わりながらエイジェンシーのコミュニティとしてのネットワークを生成してゆく。そこでは、身体や感情という偶発的な要素を通じたパフォーマンスな相互交渉のなかで、相互に相手から受動的に能動化されると同時に能動的に受動化され、身体や感情も含めた共鳴状態のなかで、主体も客体もないエロスの世界が生成する（序章と第1章と第2章）。

ここで重要なのは、この誘惑という相互行為は人間の間に限られているわけではなく、人間と非人間（モノ）との関係にも開かれていることである。フェティシズムを典型とするように、人間はモノに誘惑され、そのモノとの身体や感情を介したパフォーマンスな関係を通して他の人間と関わり合い、エイジェンシーのコミュニティを生成してゆく（第

3 こうしたエイジェンシーのコミュニティとしてのネットワークと近代のグローバル・ネットワークの違いは、今後詳細に分析してゆかねばならない重要な問題である。

5章)。そこでは、モノは理性的な能動的主体としての人間に一方的、暴力的に利用される道具としての受動的客体ではなく、誘惑を通して人間や他のモノとパフォーマンスに相互に代理し合いながら対等な二者関係を次々と生み出すことで、エイジェンシーのコミュニティとしてのネットワークを生成するエイジェントである。そうした誘惑するエイジェントとしての非人間（モノ）と人間のネットワークでは、近代の道具的世界観が人間と非人間（モノ）の間に暴力的な主客関係の連鎖を生み出すのとは対照的に、人間と非人間（モノ）が相互に誘惑し合いながら共鳴し合い、主体も客体もないエロスの世界が生成する。

誘惑についてもう一つ重要なのは、本書が示しているように、この誘惑はその対極にある全体化と客体化の暴力につながる相互闘争と並ぶ根源的な相互行為である可能性である（第2章）。もしそうであるならば、人間と非人間（モノ）を含めた他者を制御して管理することで支配しようと相互に闘争し合うことだけではなく、他者と相互に誘惑し合いながら共鳴し合うことで主体化も客体化もないエロスの世界を築いてゆくことも、人類の社会性の必然ということになる。そして、相互闘争と相互誘惑という人類の社会性の二つの両極的な自然状態の関係を問い直すことで、もはや人類自身を滅ぼしかねないほどに肥大化した近代の全体化と客体化の暴力に歯止めをかける方法を見出すことができるかもしれない。

相互闘争と相互誘惑のどちらもが人類の社会性の自然状態であるにもかかわらず、何故、近代においては相互闘争に基づく「支配／従属」の関係ばかりが肥大化し、相互誘惑に基づくエロスの世界が周縁に追いやられてしまっているのか。そして、この二つの人類の根源的な社会性をバランスよく組み合わせ、近代の長所と恩恵を維持しつつ、この近代を駆動してきた全体化と客体化という暴力的な他者との関わり合い方を修正するためには、どうすればよいのか。もちろん、この問いは容易に解が見つかるようなものではなく、本書でもその解が示されることはない。しかし、本書はこうした誘惑の可能性について理論的な考察（第2章と第3章）を行うだけでなく、今日では周縁に追いやられている誘惑の相互行為を丹念に拾い上げ（第3章、第4章、第5章）、その仕組みを精査することで、誘惑という相互行為が近代の他者との関わり合い方を補完する可能性を探り、この困難な問いに対する探究の端緒を開いている。少なくとも本書は、人類の存亡を賭けた問いに取り組む出発点として、誘惑が重要な鍵となることを教えてくれる。

4 遍在するコンタクト・ゾーン——ネットワークの隙間の過剰性の可能性

こうした可能性に溢れた誘惑に加えて、本書はこの問いを考えるためのもう一つの出発点として、長らく人類学では等閑視されてきたコンタクト・ゾーンに注目する。民族誌の実践を通した全体化と客体化の暴力のために近代人類学では見過ごされてきたコンタクト・ゾーンにこそ、その全体化と客体化の暴力に抗して新たな他者との関わり合いを模索するためのヒントが潜んでいるからである。

民族誌の実践を通して全体化と客体化の暴力を揮うことで、これまで近代人類学は個々

に自律・自立して境界が明瞭な無数の社会・文化から成る世界として地球上の人類世界を描き出してきた。この世界像のうち、明瞭に境界づけられる自律・自立した「伝統的な」社会・文化として表象される時空間が、本書では「トライバル・ゾーン」と呼ばれる。そうした社会・文化の接触面にあって、そのトライバル・ゾーンからこぼれ落ちてしまい、近代人類学がトライバル・ゾーンに執着するあまり看過してきた時空間がコンタクト・ゾーンである。本書では、メアリ・ルイズ・プラットが『帝国のまなざし』で提唱したコンタクト・ゾーンを拡大解釈し、植民地状況やポストコロニアル状況に限らず、多様な背景をもつ人びとの出会いと相互交渉のなかで権力や暴力、葛藤や抵抗などが展開される時空間が、人類学者のフィールドも含めて、コンタクト・ゾーンと呼ばれる（第6章）。

このコンタクト・ゾーンが重要なのは、それに注目することで、民族誌の実践を通した全体化と客体化の暴力が揮われるなかで周縁化されたり隠蔽されたりしてしまう多様な人びとの相互交渉の現実に迫り、近代の全体化と客体化の暴力を修正する方法をさぐるためのヒントをそこから学び取ることができるかもしれないからである。そのコンタクト・ゾーンでは、全体化と客体化の暴力を通して自己の外部の他者を自己に組み込んで自己の拡張のために動員しようとする近代のグローバル・ネットワークはもちろん、多様な社会の主体化の権力が多重に錯綜しており、それら諸権力に対して多様な方法で人びとは交渉を試みる。

全体化と客体化の暴力によって押しつけられる表象を流用した抵抗（第6章）。その暴力を揮う近代の権力と地元の諸社会の諸権力の狭間で葛藤しながら、それら複数の権力を利用しつつ、いくつもの世界を越境しながら多重に生きる実践（第3章）。グローバル・ネットワークの只中で、自らの身体をグロテスクに加工したり（第4章）、自らの身体に暴力を加えることで新たな自己に生成変化したり（第8章）することを通して、相互に誘惑し合いながらエロスの世界を紡ぎ出す実践。時間の分断を通して他者を全体化して客体化しようとする近代の暴力とは対照的に、自らの生成変化の「運命的瞬間」を他者に語りかけることで共時間的な経験に誘い込んだり、他者との時間の齟齬を笑い飛ばすことで一瞬の内省のもとに自分たちの共時間的な経験を確認しつつ他者の時間と離接的に繋がろうとしたりする実践（第7章）。他者と出会うなかで他者を全体化して客体化するのではなく、自己と他者の世界の狭間で葛藤しながら、むしろ自らが生成変化しようとする人類学者の実践（第9章、補論2）。多様な学問分野のコンタクト・ゾーンで展開される対話や会話、議論、おしゃべりから生み出される創造性（第10章）。

本書がさまざまなコンタクト・ゾーンから拾い上げる多彩な人びとの葛藤や抵抗、流用や駆け引き、多重なアイデンティティ構築などは、こうした実践が繰り広げられるコンタクト・ゾーンが全体化と客体化に決して収まることのない過剰性に溢れており、そこに人類の多様な可能性が潜んでいることを教えてくれる。そうした多様な可能性をコンタクト・ゾーンから掘り起こし、全体化によって客体化することのない民族誌のかたちで記述することで、近代の暴力に抗する多様な術を人びとに伝えること。さらには、そうした多様な術に基づいて、近代を駆動してきた全体化と客体化という暴力的な他者との関わり合い方を修正するための方法を探ること。これこそが今日の人類学に求められている任務で

あることを本書は教えてくれる。

このときに重要なのは、こうした可能性に溢れたコンタクト・ゾーンはどこか地理的に遠くにある場所ではないということである。もちろん、コンタクト・ゾーンはグローバル・ネットワークの中心である西欧から地理的に遠く離れたネットワークの末端あるいは外側にもあるだろう。しかし、コンタクト・ゾーンはそうしたネットワークの周縁や外側にばかりではなく、ネットワークの中心にもある。近代の仕組みを分析したラトゥールが明らかにしたように、近代の論理が有効なグローバル・ネットワークはどんなに稠密に張り巡らされたとしても、ネットワークとしての性質上、隙間だらけであり、時空間を面的に覆うわけではない。私たち自身の日常生活を少し顧みればわかるように、今やグローバル・ネットワークの中心の一つになっている日本に暮らしていても、私たちは近代の論理ばかりではなく、その外側にある複数の論理にも従って生きている。

このようにコンタクト・ゾーンはグローバル・ネットワークの隙間に遍在している。そうでなければ、グローバル・ネットワークが全地球をたしかに覆ってしまった今日、近代にとっての他者は消滅し、その他者を通して人類について探究する人類学もすでに消えてしまっていることだろう。かつてトライバル・ゾーンに生きている人びととして表象されてきた極北やアフリカや南米の先住民までもがグローバル・ネットワークに呑み込まれている今日、彼らが営んできたいわゆる「伝統的な」社会・文化もネットワークの隙間にこそ息づいているとさえ言える。こうして本書は私たちが身近な日常生活にいざなう。近代を駆動してきた全体化と客体化という暴力的な他者との関わり合い方を修正するには、どうすればよいのか。こうした人類の存亡を賭けた問いへの解は、私たちの身近な日常生活に遍在するコンタクト・ゾーンにこそ潜んでいることを本書は教えてくれる。

5 誘惑の森の人類学者——エロスの地下世界の肥やし

このように本書はコンタクト・ゾーンと誘惑に今日の危急の問題を解決するための方法、すなわち、全体化と客体化という近代の他者との暴力的な関わり合い方を修正する方法が潜んでいることを教えてはくれるものの、その具体的な方法を示してくれるわけでもない。相互に暴力的に排除し合う相互闘争だけではなく、相互に惹きつけ合う相互誘惑も人類の社会性の根源にあるならば、社会を生成するための方法は、権力からの呼びかけによる暴力的な主体化や暴力的な他者の客体化を基礎づける宗教的な禁忌や供犠や社会契約に限られるわけではないだろう。あるいは、その方法を編み出すためのヒントがすでにコンタクト・ゾーンで繰り広げられている多彩な相互交渉の実践に潜んでいるかもしれない。そうしたコンタクト・ゾーンでの多彩な相互交渉の分析を通して社会生成の理論を具体的に鍛え上げてゆく作業は、これからの人類学の課題となるだろう。

しかし、本書がコンタクト・ゾーンと誘惑に注目することを通して私たちがどのような世界にいざなおうとしているのか、それだけははっきりしているように評者には思われ

る。それは、人間と非人間（モノ）から成る多種多彩なネットワークが、その構成要素の人間の個体や非人間（モノ）の個体を媒介に多重にもつれ合いながら、より複雑に錯綜してゆく世界である。

その世界でもつれ合う多種多彩なネットワークのなかには、従属的に主体化される過程で近代的主体に植えつけられる二元論のイデオロギーに駆動されて今や宇宙にまで拡張してゆこうとするグローバル・ネットワークはもちろん、そのネットワークの隙間で相互誘惑を通して主体化されたエイジェントたちがエロスの世界として織り上げてゆくネットワークもあるだろうし、儀礼や日常生活のなかで従属的に主体化された主体たちが織りなす多様ないわゆる「伝統的な」社会のネットワークもあるだろう。それら多種多彩なネットワークは、それぞれのネットワークを構成する人間と非人間（モノ）の個体がネットワークを超えて交わし合う相互誘惑を通して次々とつれ合ってゆき、多種多彩なネットワークが相互に水平的に寄生し合うエロスの世界が生成してゆく。そこでは、人間と非人間（モノ）はさまざまなネットワークに同時に参加して多重に生きること、近代的主体であると同時に、ある地域社会の権力に従属する主体でも、相互誘惑を通してエロスの世界を生み出すエイジェントでもあるというかたちで、多重なアイデンティティをもつことになる⁴。

こうした多種多彩なネットワークが多重に絡み合う世界は、あるいは森の地下の様子に喩えることができるかもしれない⁵。森にひしめく多種多彩な樹木のそれぞれは、多種多彩なネットワークのそれぞれであり、地上だけを見れば、それぞれの樹木は相互に自立・自律して明瞭に境界づけられている。しかし、地下に目を転ずれば、それぞれの樹木は根を広く延ばし、その根は他の多様な樹木の根と相互に誘惑し合うなかで、相互の生存に益するかたちで寄生し合いながら縦横無尽にもつれ合うリゾームの世界が広がる。この森の地上世界こそ、理性の光のもとで暴力的に分断され、相互闘争が展開されるトライバル・ゾーンであり、その地下世界こそ、相互誘惑を通して相互に共鳴し合って寄生し合い、エロスの世界を生成することで、地上の分断された世界を根底で支えているコンタクト・ゾーンであると言えるだろう。この地下の世界としてのコンタクト・ゾーンに焦点をあて、その世界をより豊かなエロスの世界として開拓してゆくこと。これこそ、本書が目指していることであり、全体化と客体化という近代の他者との暴力的な関わり合い方を修正する方法なのかもしれない。

但し、この地下世界としてのコンタクト・ゾーンについては注意せねばならないことが一つある。それは、相互誘惑から相互性が失われてしまえば、誘惑は制御と管理による暴力的な支配に容易に変異してしまうことである。相手から受動的に能動化されると同時に

4 多重な世界生成の問題については大村らの議論 [Omura, Morita, Satsuka & Otsuki eds. 2018] も参照して欲しい。

5 この喩えと「肥やし」の着想はアナ・ティンやダナ・ハラウェイらの議論から刺激を受けている [Tsing 2015; Tsing, Swanson, Gan & Bubandt eds. 2017; Haraway 2016]。彼女たちの「人新世」や「黄泉新世」(Chthulucene) をめぐる議論に本書の「誘惑」と「エロス」の議論を結びつけることで、さらに議論を生産的に進展させることができるだろう。この点について今後考察をすすめてゆきたい。

能動的に受動化される相互性が誘惑から失われ、一方が受動的に能動化されることを拒否すれば、誘惑は一方が他方を一方的に能動化して操る暴力的な支配に、両者が受動的に能動化されることを拒否すれば、誘惑は両者が相互に相手を能動化して操ることで闘争する相互闘争になってしまう⁶。そのため、地下世界としてのコンタクト・ゾーンがエロスの世界になるためには、相互誘惑の当事者たちが受動的になることを拒否し、相手を裏切つて操作しようとすることがないように抑止し、相互誘惑から相互性が失われないようにするための装置が必要であることになる。そうした装置がなければ、一つのネットワークが他のネットワークを次々と呑み込んでゆくことになってしまうか、地下の世界も相互闘争の世界になってしまう。

おそらく、こうしたエロスの世界を守るための装置を考案することが、来たるべき世界を実現するために人類学に期待される任務の一つであろう。しかし、それ以上に重要なのは、本書で実際に行われているように、コンタクト・ゾーンの地下世界でうごめく人びととモノたちの相互誘惑の実践に自らも参加しつつ、それら実践を丹念に拾い上げて描き出すことで、さらに多くの人びととモノたちをエロスの地下世界に誘惑し、多種多様なネットワークがさらに一層豊かにもつれ合うようにすることであろう。誘惑されつつ誘惑する人類学は、地下でうごめくエロスの世界を増殖させる肥やしとならねばならないのである。

<参考文献>

- ラトゥール, ブルーノ 2008 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』川村久美子 訳、新評論。
- 大村敬一 2010 「自然＝文化相対主義に向けて——イヌイトの先住民運動からみるグローバルゼーションの未来」『文化人類学』75(1): 54-72。
- 2017a 「絶滅の人類学——イヌイトの「大地」の限界条件から「アンソロポシーン」時代の人類学を考える」『現代思想』45(4): 228-247。
- 2017b 「宇宙をかき乱す世界の肥やし——カナダ・イヌイトの先住民運動から考えるアンソロポシーン状況での人類の未来」『現代思想』45(22): 180-205。
- 2018 「人新世 (アンソロポシーン: Anthropocene)」奥野克己・石倉敏明編『Lexicon——現代人類学』以文社、pp. 46-49。
- Haraway, Donna J. 2016 *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene (Experimental Futures)*. Duke University Press.
- Omura, Keiichi, Atsuro Morita, Shiho Satsuka & Grant Jun Otsuki eds. 2018 *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*. Routledge.
- Tsing, Anna. L. 2015 *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in*

6 このことを考慮すると、相互誘惑は相互闘争よりも根源的な人類の社会性の基盤であり、相互闘争は相互誘惑から導き出されるバリエーションにすぎないと考えられるかもしれない。この点については今後考察を深めてゆきたい。

Capitalist Ruins. Princeton University Press.

Tsing, Anna L., Heather A. Swanson, Elaine Gan, & Nils Bubandt (eds.) 2017 *Arts of Living on a Damaged Planet: Ghosts and Monsters of the Anthropocene*. University of Minnesota Press.